

足立健康友の会

かばら支部ニュース

第38号
2011年9月15日
☎: 3605-5594
<http://kabara-tomonokai.kenwa.or.jp/>

原水禁世界大会報告 原爆犠牲者を追悼する21万の折鶴 31名参加

今年原爆が広島、長崎に落とされてから66年になります。そして、東日本大震災に続いて東京電力福島第一発電所の事故が起こり、多くの人が放射能汚染のせいで住んでいた家に戻れないでいます。

こんな状況のもとで開かれた原水禁世界大会に大沢一夫さんが友



の会かばら支部の代表として行ってきました。

8月25日(木) 午後6時から報告集会がかばらデイサービスセンターで行われ、暑いなか31名の方に参加していただきました。

初めにかばら支部長の田中さんより今年の世界大会がどのような情勢のもとで行われたか次のような報告がありました。

昨年5月に核不拡散条約(NPT)再検討会議で「核兵器のない世界」の実現を決議し、昨年12月の国連総会では「核兵器禁止条約の交渉開始を求める」決議が国連加盟国の圧倒的多数で採択されました。しかし、核保有国はこの方向に進んでいません。そこで、禁止条約の交渉開始を求める「核兵器全面禁止のアピール」署名が全国的に取り組みられ、54万8千人から寄

看護・介護の相談会

いつ 毎月、第3木曜日10時
どこで 小児科診察室

普段、受診しても先生と相談する時間がなく困っていること・わからないことなど相談ができます。

10月は20日10時

せられています。

引き続き大会に参加した二人の方から報告がありました。かばら支部代表の大沢さんと、かばら支部役員で区議会議員の秦野昭彦さんからです。



大沢さんからは、最初にバザー、カンパ、炊き出しなどたくさんの方のご協力、ご出で送りが、その後、大沢さんは分科会では佐世保基地の見学を選ばれました。まるで占領されたような軍港で港の8割が軍需用です。「思いやり予算」を

がありました。

秦野さんからは、世界大会全体会、原爆記念館、浦上天主堂での様子をスライドで見せてもらいました。

分科会は「核兵器・原発とエネルギー問題」でしたが、各地で展開された原発建設反対運動があり、マダラで有名な青森県大間では一人で20年間も運動を続けた人がいて結局設置を断念させたすごい人の話がありました。

秦野さんは原水禁大会とは別に震災被災地石巻での救援活動にも行かれました。その様子をスライドで報告され、町が津波で破壊された様子が次々に映し出されました。町の復興は遅々として進んでいないとのことでした。

救援活動は、仮設住宅で暮らす人達を訪問してお話しを聞くことでした。目の前で家や家族が流されて行くのを目撃した方達は心に深い傷を負っておられます。この方たちからお話しをたんと聞いてあげることが大事なのにあまり行われていないとのことでした。

最後に友の会事務局長の嶺岸さんより代表派遣活動を支えてくださった皆様へのお礼の挨拶があり散会となりました。

なお、原爆被爆者の証言をつづった映画の上映もする予定でしたが時間が不足したため、次の機会に行うことになりました。(久保記)

故郷の明暗（V）

☆「人助けの報酬」

先月の「無欲と我欲」の話は身内から聞いた話でした。今回も身内の話で恐縮ですが、思わず吹き出してしまったので紹介させていただきます。実家の姪の長男が3・11に体験した実話です。結論から言えば彼は無欲に徹し切れなかった若者の典型のような人間でした。

専門学校からの帰り道、JR仙石線の本塩釜駅を降りた時、あの「地震が来た」と言いました。改札口を出た所で一人の老婆がうずくまっているのを彼は見ました。地震の揺れで転んだか、腰を抜かした



JR本塩釜駅の近く（線路の向こうの高台まで）

格好で放心状態だったと言います。地震の直後、街中に津波の警報が鳴り渡りま

した。そのけたたましいサイレンの音を聞いて彼は、ためらうことなく、見ず知らずのその老婆を背負って高台に駆け上がったと言いました。脱力していたため「かなり重かった」そうです。その後で津波が襲ってきました。JRの本塩釜駅周辺は地形的に外洋に面した場所ではなかったのですが、それなりの勢いを持った波だったことは、その場所に立って分かりました。そのまま老婆が座り込んでいたら、流されて一命を落とした可能性の高い地点でした。

被災時に人間の取る行動には幾つかあるようで、虚脱状態に陥り何も手がつかなくなるこの老婆の様な人がいます。

もう一つは姪の長男の取った行動。これも至極、人間的な行動で、直ぐ目の前にそのまま放置したら命を奪われるかも知れない人がいる時「助けなければ」と言う直感から行動に移せる人がいると思います。

私たち中高年の若者に向ける目は、つい注文が厳しくなりがちです。「今の若い者は他人に構わず自己中心的だ」とか「損か得かで行動を

決める」などなど。しかし姪の長男の取った行動や、その後の被災地への若者達のボランティア活動などを見ると、人間はしかるべき時に、しかるべき行動を取ることができるとのことです。

話がそれてしまいましたが、3・11当日に戻します。彼はその老婆を高台に移動し終わった所で、名前を尋ねられて名乗ったということでした。ところが浮かない顔で「お礼が来ない」と一言、吐きました。その落胆振りが余りに素直過ぎたので、つい私は彼に背を向けながら吹き出してしまったしだいなのです。彼は人助けをしたのだから褒美がもらえるものとはばかり思っていた様でした。やはり「まだ二十歳前で、若い」と思いながら「そのばあちゃん、地震と津波に驚いて、言われても名前が覚えられなかったと思うよ」と話して慰めました。

彼はかたわらで首を傾げていましたので、続けて「そのばあちゃん、君の名前は忘れただろうが、津波の時に若い者から助けられたと言う感謝の記憶は死ぬまで残る。それでよしとしないと・・・」「分かった」褒美をもらえなかった不満は消えたようには見えませんでした。大叔父の私から何がしかの誉め言葉をもらって、誇らしい横顔を輝かした時、金品と言う物の報酬より大事

なものがあることを少しは感じ取ってくれたようでした。

続きは 次号
担当 嶺岸 宏

手作り作品にはげむすみれ班会

みんなで集まるのが何よりの楽しみになっている「すみれ班」。

それに手を使い、おしゃべりしながら何かを作ることが重なければ楽しさも倍増します。毎月集まる日を決め、作品作りにはげんできましたが8月は夏休みで9月に再開しました。

9月の班会では新聞紙を使った「手提げ」作りが課題となりました。参加した人同士で知恵を出し合い、手を動かして行く内になんだと「手提げ」の形が出来て行きます。

完成するとみんなで見せ合い品評会になりました。「もっときれいな物を作りたい」「次回の集まりでも再度、挑戦して姿、形の良い物を作ってみよう」と言うことになり10月の例会でも「手提げ」作りにはげむことになりました。

また、10月23日の「第25回蒲原健康まつり」では初めての試みとして友の会員や職員のみなさんが趣味で行っている写真や絵画、手



芸作品の展示会を開いてみてはと

いう話があった。その展示会に「すみれ班」で行った。

いる作品を出してはどうかと言う話題になり、「恥ずかしいから嫌」と言う人。「せっかくの機会なので出して見てもらおう」と言う人など様々な意見が出ましたが、健康まつりの前日に集まり展示の工夫をしながら、作品を発表することにしました。 亀井富巳江さん談

脱原発・第2回学習会

「原発事故の原因」

10月30日（日）午後1時より

かばらデイサービスセンター

○ 講師 野村在生 先生

原発問題住民運動全国連絡センター事務局次長